

明治四十三年 紀元一千九百七十年
 本紙 第一枚金二錢 第二枚金一錢 第三枚金一錢
 定價 金貳圓 金壹圓 金壹圓 金壹圓 金壹圓
 月曜日及大祭日の翌日は休刊(日刊)
 廣告 五十號活字一行情十錢 五十號活字一行情十錢
 料金 五十號活字一行情十錢 五十號活字一行情十錢
 發行所 京師西區小門通(電話六六三)
 印刷所 京師西區小門通(電話六六三)
 發行人 松久 神一 郎
 發行所 京師西區小門通(電話六六三)
 發行所 京師西區小門通(電話六六三)

らざるもの。治外法權撤去の事は既に本欄に於て幾度も論及したる所あるが故に贅言はす。關税に就ては吾人は曾て日韓關税同盟の事を言ひたる事あれども、今は既に六十七年以前の事にして、今日に於ては同盟以外の他の選擇の關係成立し居るを以て、日韓同盟の條約に由り、同率の關税を韓國諸港に取りよきは勿論なれども、茲當りては、日本が外ならぬ韓國に對して今看他の列國と同様の關税を拂ひ、又韓國を對して日本に對し是も他國と同様の關税を拂はしむるが如き、寧ろ馬鹿々々しき不利不便を拂へしことを欲せずの論はず。即ち手短かに言へば、日韓

を半島に注ぎ込まざるを得ざる事となるだけ其だけが彼等の富ともなる可きが、今日の日本の大發展を阻むる餘裕は有らざるなり。韓國をして自ら富ましむるに如かず(東朝)

五學會の請願 (二)

(法學部次官の談)

私立學校の現在數は目下の國狀に照して餘りに多きに過ぐるの感あり此等に對し一々相當の補助を與ふるが如きは到底國費の堪へ得るところに非ず此等の根本的解決の方法として當局者の希望は韓國に義務教育を布かんとするにあり日本に於ける義務兒童は現今自

報したるが如くに就き庵原滋政議長は
大要左の如く語れり
朝鮮の水産事業を發達せしむる爲めに
水産試験場を設置する必要はありと雖も
其位置を釜山に限るが如きは當を得たり
と云ふ可からず之を日本に觀るも海岸を有する縣縣には各水産試験場の設置あり
今韓海漁業を指導し發展せしむる目的を以て水産試験場を設置せん
とすることは少くとも東海區、南海區、西海區に各一箇所の試験場を設置するにあらざれば其目的を達すること能はざるべし而して之を設置するには約三十萬圓の經費を要す是れ韓國の上げました鎌倉には秋廣が祐實を以て、御番鍛冶にしたいと祈つて居る
又た死んで祐廣も我が師を以て鍛冶にしたいと云ふ一心である
夫が途中の機事ゆゑ、張順宙に逢つて匠の身に添ふて打たせぬのか、素人り名人ではあつたが、其の内にも從匠の名で、此時に、釜州の薩原村の刀鍛冶は残念に思つたが、何うも朝廷より致し右の御匠でございます、サア相州鍛冶のうち、大造坊佐藤は己れ祐廣と目をして、所が悪いところは出來ないといふのでなく、京都市中に、大造坊の徳の

深難なる困難なるが如し、今其機遣した報告によれば三日漳州分進隊は海州に於て賊三十一里内洞に於て賊二十四と高山洞に於て賊三十と衝突其一を逃遁高山山頂に就て賊三十三と衝突其二是楊州郡城面獨岩首に於て賊九と衝突之を潰すもしめ獲品若干の曲獲ありし等の小失のみなりと

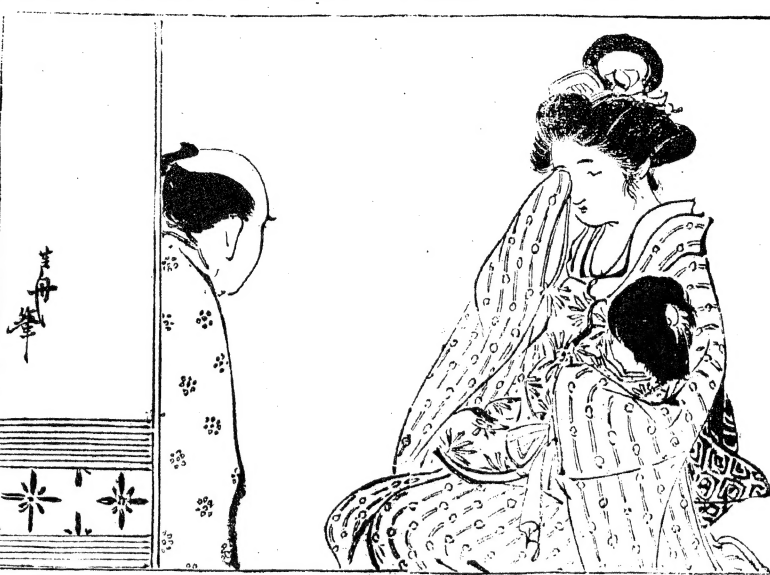
●水産試験場に就て
朝鮮海水産組合より釜山に水産試験

此度の一件を申し上げまして、そこ
誠に左大臣閣下御仁厚き方で在せと
誠に、失礼ゆゑに何うか赦免さ
番割治にてやりたい、とそこで万
小路大納言に御内意を下し給ふ、此
里小路權と宇治權とは大層な交情が
い、其のうちに愈富日が定つて、阿
も精造達押して備前・豊前・山城へ
和刀部を打つて出す所が二三振
其の内から選ひた、所が訪實も一
縣令、新羅吾國廣及九郎次郎度光の元
人を、向棧に廻して、心を籠めて打

の一件を申し上げまして、そこへ
 左大臣藤原朝臣心厚^{しんこう}は方^{かた}で在^あり
 ながら、失^{うしな}へたるに何^{なん}うか祐實^{すけさね}を
 打ち治^{おさめ}してやりたい、とどこぞで万^{よろこ}
 大納言^{だいなごん}御内意^{ごないい}を下^{くだ}し給^{たま}ふ、此^こ
 路^{みち}を、宇治權^{うじけん}とは大層^{おほい}な交情^{かうじやう}が
 其^{その}うちにも意^い當^{あた}りが定^{さだ}つて、何^{なん}
 運籌^{うんちゆう}と打^うつて、^{（中略）}雲南^{うんなん}、山城^{やまぎ}
 万^{よろこ}を打^うつて出すが、二三振^{さんしん}
 内^{うち}から選^{えら}びだす、所^{ところ}が祐實^{すけさね}も生^な
 新羅^{しんら}吾國^{ごこく}と九郎次郎^{くわにやう}度光^{たけあき}の
 向^{むか}ひに懸^かつて、心^{こころ}を奮^{ふる}めて打^う

に立寄つて、戒名^{かいな}を以て鎌倉を指して
奉る、誠に何うも惜げない。然るに鎌
倉へもう此のこと、先きに達せられた
に依つて、病中であつた九郎三郎秋廣
も、是れを聞いて、病氣快復^{びやうきくわいふく}した所を病
廣の女房させ、此の者^{もの}は山名藏人の奥
女を勤めて居りやうとしたので、誠に身のた
ゆるぬに相州藤澤の片はど、大倉
佐十郎の娘だ、夫れを藏人から致して、親に
懸合つて呉れたものだ、十月十日の月、
産ちて玉のやうな男子出生した、産
婦^{うぶ}の臍^{へし}立人も宜いが、夫の立婦らんから
山名藏人へ申し上げてた名を頂戴す
る、デ藏人自分の名榮りの元春の春を

に氣の毒で話しても致切れんくらゐだ
又た祐廣の女房のさせは子供を抱い
迎ひに出たが、夫は歸らないか
うしたことがであらうと尋ねる、何れ
から歸つて奉る、宇治左大臣のれ
敷で、上田庄司様に引留られた、何
歸るからと言はれたぞ、此の事と思
ひながら、然うしてさういふ事かと思
した前には男子を生み産後の臍立ちも
う、臍^{へし}毎子とも壯健で、結婚だ、と
の場は濟まして夫れから祐實山名藏
人へ申上て、自分のこと祐廣様死の
を委し申上て、藏人、是れを聞いて
山、其方が御養治に擧げられたるけ



轉と云ふ者が、惡事を働らいた、惡事を
 を働らいたが、上京として御靈治下に奉
 りられるやうでは、精神行正しき者は
 誰に疑ひなく、大さきに大道坊の評判
 として、佐々其の方が己れのことを思つて、
 祐廣を殺したのは、祐實と誤つたのだ
 かに残念な手違ひだつた、祐實がなけ
 れば梅州治下では佐々」と愚痴を言つ
 たが、夫れも六月の藍菊、十日の菊は
 非なく致して其の儘に鎌倉を立ち歸る
 此方は祐實歸りに、最も泊りに
 注意を教して、市場の布引屋庄兵衛方

取つて善太郎と付けて呉れた、童夫
 歸りを待つて楽しみにして居る、九
 三郎秋廣より祐廣の死んだことを知
 せぬから、素より知らない、所へ
 實澄こほりなく鎌倉相付ヶ崎へ立降
 て來る、も鎌倉の大進坊一室の方
 は残念に思つて居る、秋廣祐實の方
 は途中まで出迎へまして、大した出
 べだ、其の歸つて來た中に祐廣が居
 いから、實が何うしたかと思つ
 居る、タガ此の混雜の中だから、強
 祐廣のことを問ふ者はない、又た祐
 は祐廣の女房に是れと告げるのも、

疎に喜ばしいが、祐廣を失なつたのは
 折角の我が丹精も水の泡となり、如何
 にも残念だ、此の上は其の方何とす
 るに斷定せよと尋ねになる。祐「ハイ、私は
 祐廣の子奉太郎、此の者を成長させ
 て、天晴の名刀鍛造と致し、私の後目
 を襲とすは、是れと徳藏の私刀観治
 に致す心得、尤も當八成長の後は父の
 仇討ちをさしてやるの心得でござる、
 山「大も然らへべきである」と茲で此の春
 太郎の成長するを待つことになる、何
 時までも囚んでも居られないから、祐廣
 の妻とせよ夫が市町村にて喪死の次第
 を落もなく物語りました。

第九號
生徒募集
 告
 本年四月入學セシム本校第一學年
 生徒八十名ヲ募集スルノ應募者必キ要
 項下ニ如シ
 一 入學申請用紙、履歷書、資格書、卒業證
 明書、模試シテ、入學券、封入申込メ
 明治四十三年二月
 京城居留民團立

本校第一學年ニ入學スルコトヲ
 希キ者ハ年 齡滿十二年以上ニシテ、
 常小學校ヲ卒業シ且入學試験及体格
 検査ニ合格シ品行方正ナルヲ要ス
 一 入學試験ノ科目ニ就キ、尋常小
 學校卒業ノ程度ニ依リ之ヲ行フ
 一 願方 一、二書、方 三、願方
 四、書、術
 三 應募者ハ必ズ四月二日午前十時迄
 本校ニ出頭シ入學試験及体格検査
 期日並受驗ノ手ヲ承ケルベシ

並に歌舞伎辨當
材料の豊富と技術の熟練は割
烹界に於ける弊店の特色に有之候
京城南山町二丁目
さへば祿
出前の儀は電話又は一觸次第即刻持参
可申候
御料理席貸
和樂園高田家
(電話九三七番) 米倉町
○料理は萬事御手廻しにして高價
○園内は至極閑靜にして別荘外

四、應募者ハ左ノ書類ヲ來ル三月二十
日ヨリ同三十一日マデノ間ニ於テ本
校ニ提出スベシ
一、入學願書及履歴書
二、尋常小學校卒業證明書
三、戶籍簿本(抄本ハ無効)
四、保證書
第十號 公 告
生徒募集
第一學年凡九十名第二學年第
三學年各若千名ヲ募集ス志望
者ハ來ル三月二十八日マデニ
出願セラルベシ
明治四十三年三月一日
京城居留民國立
高等女學校

網
 松たけめし
 ▲大坂美人の
 一人前三十銭

急し道樂開
 御披露業

草餅
 櫻餅
 町本城京
 堂水寒島貞
 (番一四一話電)

番二八一話電
 やち志
 金高の多寡に拘はらず十二
 分のの御便利を以て圓相
 區の應予買物は一定の場
 保償す安全に所取相
 京城商行
 大機商行
 流貨品と雖も場所の許す限
 萬可成投期間大切に留候し
 為運賃なきと期す

○○土地高燥にして見障し京城會
 又は宴會等に適當な候

番
 金

て何れ屋ふれ然其宜人てて

あなご竹の子めし
鶏 ゑんどうめし
た な し く
た な じ く

なきて七舞と申しますから随分色々の道樂もありますが就中めし道
樂はぞ、よい道樂はとびいません、此道樂と
發揮せん爲り、わざと大阪表からわり抜きの美人を降ひよせ
釜のまゝ、御座敷の奥中に持運び御客様
減て程好くして差上ります何卒御賞味か九く御來遊の程ひとへに願入申す
御多少によらず出前も御便利に迅速にれ届け仕りますから御用命の程
御願申上ます

大和町三丁目 梅の家真向ひ

明 月

電話 七三五

のありどの事をも不聞問い出し不審
は諸所尋ね廻りたる未漸く王の家
き止めて殿重に訊問したるに王も
包み切れずして全く日本人に相違
ないと幾松を引渡したれば翌二十三
地を出發して本郷湖意兵分遣所
し目下取調中の由なるが幾松は
の隊軍隊の夏服と夏帽とを頂きの

居、返りしに美、恩
 の答たるは其の頗るに
 零三十分 餘興開始
 午後二時卅分 接續店開始 (第一爆竹)
 同時 食堂開始
 貴賓及婦人入場 (第二爆竹)
 來賓一般入場 (第三爆竹)
 午後五時 教育
 の豫定にして、右餘興としてほ
 力、芝居、鞍轡、藝者種々二〇加
 等に於て此の間絶へず奏樂、煙火の打

●本願寺の追吊會　明十一日は
例年の通り、地本願寺別院にて陸軍
念追吊會修け行ふる由なれば有志の諸
氏は頗る御参詣あるべし但し時間は午
二時よりなりと
●書畫展覧會開催　來る十三日午
十時より南大門通廣地館　天一　銀行
上）に於て日韓書畫展覧會開會の

一緒にいれぬさ」と殆んど命令的だ
私は何だか狐狸の類に誰かされても
する様な心持がして一向氣は進まんだ
が「サ、サ」と急ぎ立てられる度毎に不
思議に腰が浮上つて遂々夢心地で戸外
へ連れ出された。

じながら一心に經文を讀んで居た。(ト)

◆平民文庫◆

▲本町六丁目邊に何んとか云ふ餅屋がある其家の主人は葬師である餅屋の内へ横さんだつても葬師にならぬと云ふ法度はないのである差支へはない其の差支へのない葬師の店主一死別した暫時が程に食ひ盡さなかつた。

世の多くの婦人は
子宮病の
治療を誤て居ないか
一概に子宮病と云ても其種類は随分多
く従て治療法も種々異なるが、一般婦人
の自宅治療を見るに甚だ勝手氣儘で、

生備多年福岡醫科
科教室奉職の處今
皮膚病、瘰癧、癩病、癰
診療 午前自時午前一時迄
夜間自五時九時迄
南大門通三丁目
支那領事館前通
京誠郵便局後

皮膚科教室
 皮膚病生
 辭職左の處に開業專
 皮膚病生
 院病生殖器科
 入院隨意
 電話一七三番
 佐藤皮膚病院
 院主佐藤伊藤

岡田榮
(電話三九八番)

